

# 入試問題はなぜ難しいのか？ の文化論

東京大学文学部・大学院人文社会系研究科  
准教授 阿部公彦

2016/9/17

1

## 話しの概要

- (1) 入試問題はなぜ難しい？
- (2) 文章の「素性」をめぐって
- (3) 多和田葉子と挨拶
- (4) 現代小説の善意

2016/9/17

2

## (1) 入試問題はなぜ難しい？

「読む」とは、文字を「読む」ことである。しかし、この「読む」には、単に文字を認識するだけでなく、その背後にある意味や文脈を理解する必要がある。入試問題は、この「読む」の過程を難しくしている。その理由は、文章の「素性」が複雑であるからである。素性とは、文章の基本的な性質や特徴を指す。素性が複雑な文章は、読者に理解を促すための手がかりが少ない。そのため、読者は、文章の構造や文脈を自分で推測しなければならない。これが、入試問題が難しい理由の一つである。

2016/9/17

3

「読む」とは、文字を「読む」ことである。しかし、この「読む」には、単に文字を認識するだけでなく、その背後にある意味や文脈を理解する必要がある。入試問題は、この「読む」の過程を難しくしている。その理由は、文章の「素性」が複雑であるからである。素性とは、文章の基本的な性質や特徴を指す。素性が複雑な文章は、読者に理解を促すための手がかりが少ない。そのため、読者は、文章の構造や文脈を自分で推測しなければならない。これが、入試問題が難しい理由の一つである。

2016/9/17

4

## 入試問題の黄金パターン

- > ペーパーテストでは、必ず「読む」というプロセスが入る。
- > →「以下の文章を読んで問いに答えよ」的な読解問題。
  - > TOEFLをはじめ、非日本語圏の問題でもよく見られる。
  - (1) 手続きを前に進めるための「読み」 > 設問など
  - (2) 「読む」ことそのものが問われる > 本文
- > ここでは(2)が問題になる。

2016/9/17

5


- > ここに引用した多和田氏の文章にも見られるように、「評論文」や「エッセイ」はキーワードやキーフレーズ、topic sentenceのようなものが早めに出てくることが多い。

↓↓

- 文章の「素性」(=「これは何?」)が早めにわかる。
- 狭いスペースでまとまりのあるものを提示できる。
- 「素性」がわかりにくいときはヒントが出されることも多い。↓例

2016/9/17

6

  
 専攻 国文学部  
 三次入学試験問題  
 二〇一五年版  
 【国語】 時間 50分

氏名 \_\_\_\_\_  
 学号 \_\_\_\_\_

3

2016/9/17

国語の試験問題は、国語の知識・技能を総合的に評価することを目的として、国語の基礎的な知識・技能を問う問題と、国語の応用的知識・技能を問う問題とを適切に配分して出題する。

国語の試験問題は、国語の知識・技能を総合的に評価することを目的として、国語の基礎的な知識・技能を問う問題と、国語の応用的知識・技能を問う問題とを適切に配分して出題する。

- 1 -

2016/9/17

国語の試験問題は、国語の知識・技能を総合的に評価することを目的として、国語の基礎的な知識・技能を問う問題と、国語の応用的知識・技能を問う問題とを適切に配分して出題する。

- 2 -

2016/9/17

- ▶ 「これは～から抜粋した文章である」といった補足や、粗筋のヒントなどを提示する。

↓ ↓

- ▶ しかし、他方で「素性」(これは何?) そのものが問いの一部に含まれることも。例↓

2016/9/17

次の二つの詩は同じ作者の作品である。二つの詩に共通している作者の見方・感じ方について、各自の感想を「六〇字以上二〇〇字以内で記せ。句読点も一字として数える。

積もった雪」

上の雪  
 さむかるな。  
 つめた月がさして。

下の雪  
 重かるな。  
 何百人ものせて。

中の雪  
 さみしがるな。  
 空も地面もみえないで。

2016/9/17

大漁」

朝焼け小焼けだ  
 大漁だ  
 大羽鯛の  
 大漁だ

浜は祭りの  
 ようだけど  
 海のなかでは  
 何万の  
 鯛のとむらい  
 するだろう。

(出典 金子みすゞ全集)

2016/9/17

- ▶ コンテキストを極力排して、突然、「これはいったい何？」と詩の「素性」そのものを問う。
- ▶ 竹内康浩『東大入試 至高の国語「第二問」』(朝日選書)はこの問題そのものを論ずるユニークな本。
  - 著者の竹内氏が東大を受験した年(1985年)の問題

2016/9/17

13

- ▶ 評論文などの問題では、段落ごとのトピックセンテンスや論理的なステップの理解が試されることが多い。
- ▶ =広い意味での「情報処理能力」「事務能力」を試す
  - ↓
- ▶ 文学作品では、最後まで読んでもトピックセンテンスにあたるようなものが明瞭でないことがしばしばある。→「何の話か？」という形でまとめることが難しい。
- ▶ **では、文学作品が出題されるときには何が試されている？**

2016/9/17

14

## (2) 文章の「素性」をめぐって

- ◇一般的に詩や小説は、そう簡単には「素性」を明かさない。
- タイトルだけでは何の話かわからない。
  - 冒頭を読んでもわからない。
  - 下手すると、最後まで読んでもよくわからない。
    - > 帯や扉や「解説」に「粗筋」のヒントがあるのもそのため。
    - > 書評も助けに。

2016/9/17

15

## なぜか？

- ▶ 詩や小説では必ずしも「これは何か？」に対して答えを出すことで読解が終了するわけではない。
- ▶ むしろ「そもそもこの文章の“正体、が何なのか」を読みとるべく格闘するプロセスそのものが、詩や小説を読む作業の醍醐味。
- ▶ 「何？(what?)」がそう簡単にわからないことで、読書体験が生まれる。
- ▶ この「何？」は「どんなふうにか？(how?)」と分かちがたく結びついている。

2016/9/17

16

従って、とりわけ小説の読解では以下のようなプロセスがその一部となりやすい。

遭遇／未知／謎

↓

自己紹介／開示／暴露／発見

↓

なじみ

\* このプロセスは、作品プロットとして仕組まれたり、もっと小さなセクションや、段落単位などでも見られる。

2016/9/17

17

## 一つの仮説：

小説的読書と他者(異文化)遭遇体験は重なるのでは？

- ▶ 18世紀から19世紀にかけてのヨーロッパでは交通網、通信網がこれまでにないほどのペースで発達。「未知の他者との遭遇・なじみ」も加速的に進行した。
- ▶ まさにこの時期に隆盛期を迎えた小説というジャンルは、社会全体の「遭遇・なじみ」への機運を引き受ける形で成熟したのでは？
- ▶ 近代には、他者との遭遇を円滑に進めるさまざまな「道具」が発達した。=文化は「出会い」に膨大なエネルギーを使ってきた。
  - 1) 挨拶、作法 (politeness)
  - 2) 出会いの場(パーティ、お見合い、会合、娯楽...)
  - 3) 疑似的な「遭遇」の演出(小説、演劇、映画)

2016/9/17

18

## 小説における「遭遇」

1)「出会い」という出来事を描く。

**2)読むことそのものが「出会い」的に行われる。**

2016/9/17

19

## (3)多和田葉子の「ご挨拶」

その日の夕方から夜にかけて、あなただけの小さなホールで踊った。竹裂けるような石橋を叩くような音の群れがまた耳の奥で響き続けた。乗れば、明日の午後二時から本番の夜行列車が七時から翌日早起きして飛行機で行くよりもこの計画にほくそ笑んでいる。あなたは自分の

駅の様子がちよっとおかしい。ホームに人が嫌に少ないのである。何か秘密でも隠しているようである。駅員をつかまえて、どつかした。静かに観察しているしがない。駅全体が化粧をかぶっているのに、あなたはそれを剥がすことができ

(容疑者の夜行列車『七』)

2016/9/17

20

『容疑者の夜行列車』からは読者との「遭遇」→「なじみ」のプロセスがどう読み取れるか。

さまざまな「コード」

◇唐突さ。話が前置きなしに突然始まる。

◇心理的、内面的。

>「私」という語はないが、言葉が「私的」「小声」。

>科白的でもあり地の文のようでもある。

◇相手は何かを隠している、という感覚。

>不安。被害妄想的。

>こちらは何かを隠し持っているという自覚とセット。

2016/9/17

21

◇主人公を二人称「あなた」で呼ぶ

— はじめは語り手と「あなた」との「距離」を感じさせる。

— 読んでいるうちに慣れる。慣性。

— 声の強さ。命令的。突き放す。弾効的。

>自分語りのな「耽溺」はない。

◇「あなたは自分の計画にほくそ笑んでいる」

— 意地悪。茶目っ気。

— 伏線的。

◇段落冒頭に直接的な「心理」の言葉がある。

「駅の様子がちよっとおかしい」

「それにしても空いている」

>物語のリズムをつくる心的反応。

2016/9/17

22

▶ ◇他者との距離が大きい。

▶ ◇関係性がどこか戯画的(漫画チック)

▶ ◇会話のぎこちなさがかえって意味ありげで寓話的。

▶ ……

2016/9/17

23

↓ ↓

▶ 意識するとしなやかにかかわらず、こうした「コード」(素性)がテキストから差し出される。(必ずしも作者も意識していない)

▶ 読み手はときにそれに気づいたり気づかなかったり、意識したりしなかったりしながら、「コード」を受け入れることで読みの体験に足を踏み入れる。

▶ → 徐々に作品の「素性」「正体」が体感される。相手＝テキストとの距離感がはかられる。

→「なじみ」

▶ 読者が「なじみ」のプロセスから感じ取る「人間関係のファクター」

親しさ／冷淡さ 善意／悪意

やさしさ／怖さ やわらかさ／硬さ

2016/9/17

24

- ▶ 入試問題でも文学作品を使ったときには、「素性」をめぐる問いが含まれてもおかしくない。
- ▶ 根底にあるのは、文章の引用に伴って生ずる問題。
- ▶ 引用された文章の「コード」をどう発見し、どうその文章との距離を測定するか。  
↓
- ▶ つねに「コード」読み取り能力の必要を社会が感じている証拠？
- ▶ そもそもあらゆる文章は「引用的」？  
= 断絶感とともにある  
= 文章の根源的な他者性。良質の問題はそこを問う？

2016/9/17

25

## =他者との遭遇のプロセスとの類似

- ▶ 見知らぬ他者と出会ったときも、我々は相手の言語、出身、身分、財産、傾向、意図などを読み取っていく。
- ▶ その中でもとくに大切な要素は、相手がどれくらいこちらと「仲良くしようとしているか」。  
= 親密度や善意・悪意の判断。
- ▶ このあたりはこのところ研究が盛んになっている「ポライトネス」(配慮)という概念が参考になる。  
↓↓

2016/9/17

26

## 「配慮」(politeness)について

- ▶ 質問をするなど一定の働きかけをすることで、相手に対し自分がどのような態度を持っているかを示し、相手にもそれに応じた対応を期待する行動。
- ▶ 日本文化のあいさつや敬語もこれと重なるが、きわめて形式主義的に運用されるので、非日本語圏の「配慮」のオープンさは少ない。
- ▶ ただ、形式主義的な運用でも微細な距離の違いに敏感に反応することは可能。  
→ 小説はもともとは輸入物だが、日本文化の中でとりわけ豊富な可能性に満ちたジャンルとなった。
- ▶ → 逆にいえば、小説の衰退は、言語を通した距離の読み取り能力の衰退をも示すのか。

2016/9/17

27

- ▶ 小説作品でも、語り手と読者の距離は一律ではない。多和田作品では「あなた」という呼び方につけこんだんなかたくなさや遠さがあり、最初はこちらも身構える。語り手は終始不安や警戒心も示すため、一定の距離が保たれ安易な接近や感情移入が禁じられる。
- ▶ しかし、「不安」などの弱い部分をさらしたり、不機嫌に構えて心のネガティブな面を露出することで、一段深いレベルの「正直さ」を語り手に読み取れることもできる。
- ▶ また強面のふりをした語り手の茶目っ気には、「親しみ」ややさしさも読める。

2016/9/17

28

- ▶ 私たちはこうしたテキストの態度表明を「コード」として受け止めながら、作品に「あなたは誰？」と問いかけつつける。

- ▶ 『容疑者の夜行列車』はとりわけ「あなたは誰？」を説明するのが難しい作品。要約不能なだけに、読書体験が記号化したり、還元されたりせず、生の「体験」そのものにとどまりつつける。

2016/9/17

29

## 4) 現代小説と「善意」

- ▶ 19世紀のイギリス小説ではsympathyが一つのキーワードとなっており、語り手が登場人物に同情したり愛情を示したりしながら、読者にも親しげに語りかけるといったことが普通に行われていた。
- ▶ 20世紀になるとこうした善意の表明はぐっと控えめになり、語り手はつけこんでであったり、読者などいまいかに振る舞うことが増える。とくにモダニズム期の実験的な作品。

2016/9/17

30

- ▶ 日本の自然主義系の小説や私小説も、読者に対しぶっきらぼうに、あるいは不親切に振る舞うことでむしろ真の「誠意」を表明しようとしていたフシがある。多和田作品もマクロな目で見るとそうした系譜につながる。
- ▶ また自然主義色の強かった「純文学」の伝統では、読者に直接語りかけあからさまに善意や親愛の情を示すことを避けていたと思える。

2016/9/17

31

- ▶ 入試問題で出題者が問うのは、まさにそうした「コード」。
- ▶ 「どこにコードが隠されているか？」を問うのがもっとも有効だろうが、それだと採点がしにくいので(東大入試第二問はそこを問うた。きっと採点に自信があったのだろう!)、出題者がコードの地点にまで誘導して、その読み取り法を確認する、というやり方をとる。
- ▶ しかし、誘導してしまうと「情報処理能力」や「事務能力」確認型の問題となりがち。
- ▶ → 鷗友学園の例

2016/9/17

32

- ▶ こうした経緯もあり、問われるのは「文章の素性」や「テキストの潜在的な意味」であるより、「出題者の狙い」となりがち。
- ▶ 通常小説が持っている豊富な意味の可能性が一気に矮小化され、「まあ、どうせこの程度のことを読みたいんだろうよ」といった回答者のシニカルな態度を生み出す可能性。
- ▶ とはいえ、「これはいったい何?」「あなたはいったい誰?」という状況を体験する問題として、小説をはじめとした文学作品が有効であることはあらためて確認できる。

2016/9/17

33

## 補足

- ▶ 必ずしも「コード＝意図」ではない。
- ▶ 未知の他者同士には「意図」も「狙い」もないことも。
- ▶ 小説家が「意図」や「狙い」を意識化していないこともありうる。
- ▶ むしろ、どう「意図」が生まれるか、距離をはかるという作業が大事。

2016/9/17

34

## 文献

- ▶ 阿部公彦『善意と悪意の英文学史 — 語り手は読者をどのように愛してきたか』(東京大学出版会 2015)
- ▶ 滝浦真人『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』(大修館書店 2005)
- ▶ —『ポライトネス入門』(研究社 2008)
- ▶ —『日本語は親しさを伝えられるか』(岩波書店 2013)
- ▶ 竹内康浩『東大入試 至高の国語「第二問」』(朝日新聞出版 2008)
- ▶ 多和田葉子『容疑者の夜行列車』(青土社 2002)
- ▶ ベネロピ・ブラウン、スティーブン・C・レヴィンソン、田中典子監訳『ポライトネス — 言語使用における、ある普遍現象』(研究社 2011)

2016/9/17

35